

岡山大学における実践型科目について

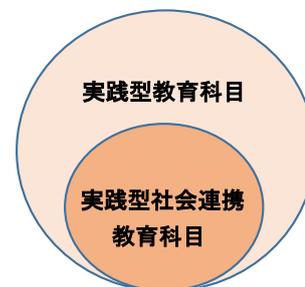
岡山大学における実践型科目の基準を以下のとおり設定する。

(1) 実践型教育科目と実践型社会連携教育科目

- ・ 学生が主体的に実践活動に参加して学ぶものを実践型教育科目とする。

例：測量実習など

- ・ 実践型教育科目の中で、社会連携を通して学ぶものを実践型社会連携教育科目とする。



(2) 社会連携とは

社会連携は、岡山大学の SGU-PRIME プログラムに示された 3 側面を体験できる現場を通して学ぶものとする。

※社会連携教育という場合の社会は、下表の 3) 異社会体験に限定されない。

3 側面	1)異文化体験（学修現場が海外である、留学生・外国人と一緒に学ぶなど）
	2)異分野体験（専門以外の世界を知る、異分野の学生や研究者等と交流するなど）
	3)異社会体験（行政や企業、町内会といった様々なコミュニティに直接触れるなど）

社会連携教育科目の例示

- ・ 教員と学生に加え企業の研究者等が議論を重ね、試作や分析をしている（異社会の側面）。
- ・ 複数部局の教員や学生が参加し、それぞれの専門を融合させる中で新しいものを生み出そうとするもの（異分野の側面）。
- ・ 教育実習など、学生が学校現場に出向き、児童・生徒や教職員と触れ合い学ぶもの（異社会の側面）。

※上記は一例であり、各科目の内容に基づき担当教員が判断するものとする。

参考：以下の学修（教育）に該当する場合は、基本的に実践型社会連携教育科目である

学修（教育）の名称	内 容
サービス・ラーニング	学生が、自分の持つ何らかの知識や技能を用いて、地域社会に貢献する活動を通して学ぶ。
CBL (community based learning)	学生が、地域コミュニティでの活動を通して学ぶ。
インターンシップ	学生が、企業などでの就業体験を通して学ぶ。

(3) 「準備」と「省察」

実践型社会連携教育科目は、ただ単に現場に出ればよいのではなく、一連の授業の中に準備のステージと省察のステージをセットで組み込むことを必要条件とする。

例：「地域の安全を考える」という科目があり、その活動の一環で、交通安全キャンペーンに参加し、ティッシュ配りをするとします。その際、ティッシュを配るだけではなく、「事前に配る場所の通行人の特性を調べ、それに合わせた配布資料を作ったり、通行人に対する聞き取り調査を準備する。事後には、ティッシュを受け取った人の反応や、キャンペーンの効果、以後のより効果的なキャンペーンのあり方を話し合い、改善策を提案する」ステージがある、というイメージです。

(4) タイプ分け

まず、社会連携を伴う「実践型社会連携教育科目」と、社会連携を伴わない「実践型教育科目」に分け、次に、実践型社会連携教育科目についてのみ、以下のタイプ分けをする。

分類	記号	解説
基本タイプ	A	①地域や企業等の現場に出向き、かつ②その時間数が全授業時間数の3分の1以上、③成果報告会（発表会）を開催する（可能であれば、学外の関係者が参加し、授業自体の評価をすることが望ましい）、の3条件を全て満たす。
	B	地域や企業等の現場に出向く、または現場の課題を抱える当事者とのディスカッション等の学修活動が1回以上ある。ただし、単に外部講師が講義するだけの授業は対象としない。
グローバル要素の付加	G ⁺	社会連携して学修する現場が、外国または国内の外国人コミュニティである。またはSGU3側面のうち異文化体験が深いもの。 (例：国際インターンシップ、国際学会発表) ※例えば、留学生が市内の商店街で聞き取り調査をしたり、販売体験をしたりする場合は、留学生にとってはG ⁺ の科目となる。
	G	留学生と日本人学生が協働することにより多様性や異文化理解を進めつつ学ぶものである。海外とのテレビ会議など多言語でのディスカッションが行われる。など。 ※単にクラスに留学生がいるだけでは、Gタイプとならない。

(5) シラバスへのタイプの記載

実践型社会連携教育科目 上表の組み合わせにより、①Aタイプ、②Bタイプ 及び
③G⁺Aタイプ、④GAタイプ、⑤G⁺Bタイプ、⑥GBタイプ
その他の実践型教育科目 ⑦Cタイプ
実践型科目に該当しない ⑧非該当

として、実践型科目のタイプをシラバスに記載する。